

『南山神学』44号(2021年3月) pp.35-54.

マルタとマリア

—ルカ 10 章 38-42 節の文学的考察(後半-1)—

終 暁生

はじめに

本稿は、「マルタとマリア」—ルカ 10 章 38-42 節の文学的考察(前半)—の続きで、前半が叙述文を中心に考察したものであるのに対し、後半は会話文を分析するものである。

「マルタとマリア」の後半部分は、マルタとイエス、二人の会話であり、その内容は、前半の叙述文よりも重要であるゆえ、詳細に考察するため、後半-1-においては、その最初の部分である二人の「呼びかけ」までを考察することとする。

3. 会話文「マルタとイエス」(10:40b-42)

「主よ、あなたは何とも思われませんか。私の姉妹は私一人に奉仕することを放ってしまいました¹。ですから、私に加勢するよう、彼女に云ってください。」

¹ 「主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思ひ給はぬか」(文語訳)「我姉妹(わがしまい)の我一人(われひとり)を遺して饗応(もてなし)さしむるを意とし給わざるか」(ラゲ訳)「主よ、姉妹がわたしだけに御馳走のことをさせているのを、黙って御覧になっているのですか」(塚本虎二訳)「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか」(口語訳)「主よ、わたしの姉妹は、わたし一人にもてなしをさせておりますが、何ともお思いになりませんか」(フランシスコ会訳)「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか」(新共同訳)「主よ、私の姉妹が私を放っておいて、[私]だけに給仕させている[のを見て]、なんとも思われませ

すると、主は彼女に答えて云われた。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い煩い、掻き乱されている。しかし、必要なことは一つである。マリアはよい役割を選んだのだ。それは彼女から取り去られてならないものである。」

3.1.会話の形式

会話文は、マルタとイエス、女性と男性、迎え入れる側と迎え入れられる側、双方の発言が記されており、会話全体は a-b-b'-a' のキアスムス(交差法)形式で対比的に表現されている。

- A 導入文(40a) そこで、彼女は傍らに立って云った。
- a マルタ(40b) 「主よ、あなたは何とも思われませんか。
私の姉妹は私一人に奉仕することを放ってしまいました。
- b マルタ(40b) だから、彼女に云ってください。私に加勢するように。」
- B 導入文(41a) すると、主は彼女に答えて云われた。
- b' イエス(41b) 「マルタ、マルタ、
あなたは多くのことに思い煩い、掻き乱されている。
- a' イエス(42) しかし、必要なことは一つである。
マリアは良い役割を選んだのだ。
それは彼女から取り去られてならないものである。」

「マルタとマリア」の物語の前半部分は、叙述文(44 語)であるのに対し、後半部分は会話文(45 語)であり、物語全体は整合的に記されている。

後半部分の会話文の前半 A は、マルタの発言(導入 3 語+17 語=20 語)、後半 B はイエスの発言(導入 6 語+21 語=27 語)が記されており、それぞれがまた前後の a-b と b'-a' の二文節に分けられている。

マルタの発言の前半 a(40b α)では、姉妹に対する愚痴がイエスに述べられ、後半 b(40b β)では、そのことに関して、イエスに何とかしてもらえないかとの願い

んか」(岩波版)「主よ、姉妹は私だけにおもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか」(協会共同訳)

が言われる。

それに対してイエスは、前半 b'(41b)においては、マルタの心の有りようについて注意し、後半 a'(42)においては、そのこととの関連で、彼女の姉妹マリアの役割がどんなものであるかを説明する。

すなわち、叙述の形式と同じく、会話の形式においても、a-b-b'-a'のキアスムス(交差法)形式で記されている。ただ叙述文の場合には、二人の姉妹の事実が淡々と記されているだけであるのに対し、マルタとイエスの対話を記す会話文の場合には、二人の発言内容の相違対立が極めて鮮明に打ち出されている。

イエスをもてなそうと甲斐甲斐しく一と言っていていいであろう一奉仕するマルタに、なぜイエスは同調せず、一見冷たいこうした言葉を投げかけたのであろうか。

ルカ福音書は過ぎ越しの食事の席で、イエスが次のように言っていることを記している。「～指導する者/ヘーゲーメノス/hēgoumenos/ἡγούμενος は、仕える者/ディアコノン/diakonōn/διακονῶν のようになりなさい。27. 食事の席に着く者/アナケイメノス/anakeimenos/ἀνακείμενος と給仕する者/διακονῶν では、どちらが偉いか。食事の席に着く者/ἀνακείμενος ではないか。しかし、私はあなたがたの中で、仕える者/給仕する者/διακονῶν のようである。」(22:26f)

こうしたイエスの「仕える」(διακονέω)ことが大事であると言っている言葉と、マルタが「奉仕する」(διακονέω)ことに対して、それが「思い煩い、掻き乱されている」と言い論ずる言葉との間にある齟齬、乖離は何であろうか。イエスのこの言葉を素直に受け取れず、疑問に思うのはマルタだけではなく、この記事を読む多くの者がそうでないだろうか。

3.1.1.二人の対比

① 導入句一マルタ「女性/姉」・イエス「男性/主」一

マルタ(40) ②そこで(δέ) ①彼女は傍らに立って(アオ・分詞) ③云った(3sf)

イエス(41) ②すると(δέ) ① 主は彼女に答えて(アオ・分詞) ③云った(3sm)

マルタ(40) ① ἐπιστᾶσα (aor.part) ② δὲ ③ εἶπεν(3sf) Κύριε

イエス(41) ① ἀποκριθεὶς (aor.part) ② δὲ ③ εἶπεν(3sm) αὐτῇ ὁ κύριος

マルタとイエスの発言の導入句はほぼ同じである。どちらも、まず最初はアオリスト単数分詞(3sf/3sm)で始まり、次に小辞「そこで/すると」デ/de/δὲが続く、最後に動詞「云う」エイポン/eipon/εἶπον(3sf/3sm)をもってそれ以降の発言が導入される。一方はイエスの「そばに立って」エフィステーミ/ephistēmi/ἐφίστημι=ἐφ(そばに)+ίστημι(立つ)云い、他方はマルタに「答えて」アポクリノマイ/apokrinomai/ἀποκρίνομαι 云う²。

明らかに異なるのは、41節では語る主語が「主」と具体的に「主は彼女に」と記され³、語る相手マルタが代名詞で書かれているという点である。「主は」と記されるのは、マルタが「主よ」とイエスに呼びかけたことに対応する。

(i) 小辞デ/de/δὲは、「マルタとマリア」(10:38-42)の中で5回用いられており、会話文においては、種々様々に「しかし、そこで、すると」等々に訳され、マルタとイエス、それぞれに2回ずつ、合計4回用いられている。

40a 「しかし、マルタは～忙殺されていた」 ἢ δὲ Μάρθα

40b 「そこで、彼女は傍らに立って云った」 ἐπιστᾶσα δὲ εἶπεν

41b' 「すると、彼は 彼女に答えて云った」 ἀποκριθεὶς δὲ εἶπεν

42a' 「しかし、必要なことは一つである」 ἐνὸς δὲ ἐστίν

(ii) 分詞は、叙述文ではマリアに2回、会話文ではマルタとイエスそれぞれに使われている。

叙述文	マリア(39a)	呼ばれる	マリア(39b)	そばに座って
	マリア(39a)	καλουμένη	マリア(39b)	παρακαθισθεῖσα
会話文	マルタ(40)	傍らに立って	イエス(41)	答えて
	マルタ(40)	ἐπιστᾶσα	イエス(41)	ἀποκριθεὶς

² “δὲ εἶπεν” 3:13.4:43.7:43.8:10,30,48,52.9:59.10:26,37,40,41.11:28,46.12:14.13:23.14:16.15:27,31.16:6,6,7,30.17:37.18:21,27,29,41.20:3,25.21:8.22:10,25,33,34,38,48.

³ 「マルタとマリア」(10:38-42)の單元では、「イエス」の名前は出て来ない。「イエス」の名前は、前の「よきサマリア人の譬え」(10:25-37)の單元の最後に用いられている。

(iii) 「云う」エイボン/eipon/εἶπον は、マルタとイエスの発言のそれぞれの導入句において同形の三人称単数「云った」エイペン/eipen/εἶπεν が使われているが、あと1回は、マルタの発言の中で、彼女がイエスに、「彼女に言ってください」という命令形のエイペ/eipe/εἶπε が用いられている。すなわち、①マルタ→イエス、②イエス→マリア、③イエス→マルタという囲い込み構成になっている。

- ① そこで、彼女は傍らに立って云った。 ἐπιστᾶσα δὲ εἶπεν(40a)
- ② だから、 彼女に云ってください。 εἶπὲ(40b) οὖν αὐτῇ
- ③ すると、 主は答えて云った。 ἀποκριθεὶς δὲ εἶπεν(41a) αὐτῇ

② マルタとイエスの会話

マルタとイエス、二人の発言の最初は、両者共に相手への「呼びかけ」である。マルタは「主よ」(呼格)、イエスは「マルタ、マルタ」(呼格)と呼びかける。前者の呼びかけは1回であるのに対し、後者のそれは2回である。続いて、マルタは自分が姉妹からこうむる迷惑について語り、他方イエスはマルタの心の有りようについて述べる。最後にマルタは「姉妹に言ってください」と頼み込むのに対し、イエスは「マリアは良い役割を選んだのだ」と肯定的に主張して、彼女の行為を擁護する。

マルタの発言(40α) a	マルタ関連	「～私一人に奉仕することを」
(40β) b	マリア関連	「～、彼女に云ってください」
イエスの発言(41) b'	マルタ関連	「あなたは、～思い煩い、～」
(42a)a+b	マルタ・マリア関連	「しかし、必要なことは一つ」
(42b) a'	マリア関連	「マリアは良い役割を選んだ」

(1) マルタの発言「主よ」

福音書の中で、イエスのへの呼びかけの言葉には、「先生」⁴、「主」⁵、「ダビデの子」⁶、「ラビ」⁶などがある。それらの中で一番多いのは「主」である。

ギリシア語において、「主」の主格はキュリオス/*kýrios*/*κύριος*、呼格はキュリエ/*kýrie*/*κύριε* と区別がある⁷。しかし日本語には、本来呼格がないので、主語に終助詞の「よ」をつけて、「主よ」とか「娘よ」のように訳して呼びかけをあらわすことが多い。しかしたとえば、終助詞の「よ」をつけて「先生よ」などとは呼びかけない⁸。

「主」の呼格キュリエ/*kýrie*/*κύριε* は、新約聖書全体では 121 回ほど用いられている⁹。そのうち、ルカ福音書では 26 回使われているが¹⁰、女性で「主よ」とイエスに呼びかけるのはマルター一人である。

イエスもまた「主よ」と呼びかけるのであるが、これは「父よ、天と地の主

⁴ 「あなたがたは、私を『先生』とか『主』とか呼ぶ」(ヨハ 13:13)。先生/*ディダスカレ*/*didaskale*/*Διδάσκαλε*(呼格)全 31 回。マタ(6 回)8:19.12:38.19:16.22:16,24,36。マコ(10 回)4:38.9:17,38.10:17,20,35.12:14,19,32.13:1。ルカ(12 回)3:12.7:40.9:38.10:25.11:45.12:13.18:18.19:39.20:21,28,39(3 回).21:7。ヨハ(3 回)1:38.8:4.20:16。

⁵ ダビデの子/ヒュイエ *ダウイ*/*huie Daud*/*Υιὸς Δαυίδ*(呼格)全 9 回。マタイ 5 回[8:29=神の子]9:27.15:22.20:30f。マコ 2 回[5:7=神の子]10:47f。ルカ 2 回[8:28=神の子]18:38f。ヨハネに「ダビデの子よ」は用いられていない。

⁶ ラッビ/*rabbi*/*ῥαββί*(呼格)[「岩波版」は、すべて「ラビ」と音訳するが、多くの邦訳は口語訳をはじめとして、ヨハ 1:38,[49]以外、その意を取って「先生」と訳す]=全 15 回。マタ 23:7f. 26:25.49。マコ 9:5.11:21.14:45。ヨハ 1:38(ラビ=訳すと『先生』という意味), [49].3:2.26.4:31.6:25.9:2.11:8。用法は呼格のみで、ルカに「ラビ」は使われていない。*ῥαββί* はアラム語で、「私の主(大いなる者)」

⁷ キュリオスのほか、*デスポテス*/*despotēs*/*δεσπότης* は、10 回中、3 回が呼格で「主よ」と訳される。([*δέσποτα*]ルカ 2:29。使 4:24。[*δεσπότης*]黙 6:10)

⁸ 「主よ」はすべての日本語訳に共通するが、マルタに関しては、「よ」が付いている訳(「文語訳」と「口語訳」と付いていない訳(ラゲ訳、塚本虎二訳、新共同訳、フランシスコ会訳、新改訳、協会共同訳)がある。

⁹ マタイ 35 回、マルコ 1 回、ルカ 26 回、ヨハネ 34 回、使徒言行録 15 回、ローマ書 2 回。ヘブル書 1 回、黙示録 7 回。

¹⁰ ルカ 5:8,12.6:46,46.7:6.9:54,59.61.10:17,21,40.11:1.12:41.13:8,23,25.14:22.19:8,16,18,20,25,22:33,38,49。但し 7 回は譬え(13:8,25.14:22.19:16,18,20,25)においてであり、通常「ご主人様」と訳され、イエスに対してではない。

よ、あなたをほめたたえます」と、聖霊によって喜びに溢れて言う父への言葉としてである(10:21)。

弟子たちの中では、ペトロとヤコブ・ヨハネが「主よ」と呼びかけるが、そのほか、ザアカイと百人隊長、重い皮膚病者と盲人、無名の人々などが「主よ」と呼びかけ、願いごとをしたり、癒しを求めたりする¹¹。

ルカ福音書以外で、女性がイエスに対し「主よ」と呼びかけるのは、ルカの「マルタとマリア」に対応するヨハ 11:1-12:11 に出て来る二人の姉妹である。マルタとマリアが 1 回(11:3), マルタが 3 回(11:21,27,39), マリアが 1 回(11:32), 「主よ」と呼びかける¹²。

ここで大事なのは、マルタが 2 回目に「はい、主よ¹³、あなたは世に来られる神の子、キリスト/σὺ εἶ ὁ Χριστὸς ὁ υἱὸς τοῦ θεοῦ ὁ εἰς τὸν κόσμον ἐρχόμενος」(11:27)と呼びかけて信仰を告白することである¹⁴。これはマタイ福音書であるが、シモン・ペトロが「あなたは生ける神の子キリスト/Σὺ εἶ ὁ Χριστὸς ὁ υἱὸς τοῦ θεοῦ τοῦ ζῶντος」(16:16)と答えて云うのに対応する¹⁵。イエスをキリスト＝メシアとして信仰告白する者として、一般的には弟子たちの代表者で男性であるペトロの名が挙げられるが、女性であるマルタもまたペトロと同じ信仰を表明しているということを挙げることは非常に大事なことであると思われる。

ペトロ「あなたは 生ける神の子 キリスト」(マタ 16:16)

マルタ「あなたは世に来られる神の子、キリスト」(ヨハ 11:27)

¹¹ シモン・ペトロ:5:8,12:41,22:33.ザアカイ:19:8.ヤコブとヨハネ:9:54.マルタ:10:40.弟子:11:1,17:37.使徒:22:38.人々:22:49.人:9:59,13:23.

¹² この箇所ではほかに、弟子たち(11:12)、ユダヤ人たち(11:34)の男性も「主よ」と呼びかける。女性と男性、合わせて合計7回「主よ」が言われている。

¹³ 「はい、主よ」ナイ キュリエ/Nai kyurie/Ναὶ κύριε.は5か所で言われている。二人の盲人(マタ 9:28).カナンの女性(マタ 15:27).マルタ(ヨハ 11:27).ペトロ(ヨハ 21:15f).祭壇(黙 16:7)

¹⁴ サマリアの女性は、「私はキリストと呼ばれるメシアが来られることを知っています」(ヨハ 4:25)と言うが、「もしかしたら、この方がメシアかもしれません」と言うのみである。

¹⁵ 大祭司は最高法院での裁判で、「生ける神に誓って私たちに答えよ。あなたは神の子、キリストなのか」(マタ 26:63)と言う。

ペトロ Σὺ εἶ ὁ Χριστὸς ὁ υἱὸς τοῦ θεοῦ τοῦ ζῶντος

マルタ σὺ εἶ ὁ Χριστὸς ὁ υἱὸς τοῦ θεοῦ ὁ εἰς τὸν κόσμον ἐρχόμενος

ヨハネ 11 章で、マルタは 3 回くりかえし、「主よ」(11:21,27,39)と呼びかけるが、4 章のサマリアの女性もまた 3 回くりかえし、「主よ」(4:11,15,19)と呼びかける。そのほか女性としては、マタイ 15 章に書かれている悪霊に苦しめられている娘を持つカナンの女性も、助けを求める際に 3 回くりかえし、「主よ」と呼びかける(15:22,25,27)。

このような「主よ」の 3 回のくりかえしは男性においてもあり、ヨハネ福音書には、ペトロがイエスとの会話で 3 回くりかえし、「主よ」と呼びかける(4:11,15,19)箇所がある。またこれはイエスに対してではないが、ルカ福音書の「ムナの譬え」(19:11-17)の中で、高貴な人の十人の下僕のうち、三人が「キュリオス」(ここでは一般的に「ご主人」と訳される)と呼びかける箇所がある。並行箇所のマタイ 25:14-30 は、「タラントンの譬え」として、タラントンを預けられた三人の下僕のうち、最後の一人はタラントンを地中に隠して叱責されることを書き記している。

「主よ」くりかえし三回

- ┌ a カナンの女性 (マタ 15:22,25,27) 「主よ、ダビデの子よ、私 を憐れんで」
- └ a' 二人の盲人 (マタ 20:30,31,33) 「主よ、ダビデの子よ、私達を憐れんで」
- ┌ b マルタ (ヨハ 11:21,27,39) 「はい、主よ」 → 「私は知っています」
- └ b' ペトロ (ヨハ 21:15,16,17) 「はい、主よ」 → 「あなたは知って～」
- ┌ c 三人の下僕 (ルカ 19:16,18,20) 「主よ、あなたの一ムナで十ムナを稼ぎ」
- └ c' 三人の下僕 (マタ 25:20,22,24) 「主よ、あなたは五タラントンお預けに」
- d サマリアの女 (ヨハ 4:11,15,19) 「主よ、あなたは汲む物をお持ちでないし」

姦通の場で捕らえられた女性を、律法学者たちやファリサイ派の人々が、連れて来て、イエスに「先生/Διδάσκαλε」(ヨハ 8:4)と呼びかけて訴える口実を得ようとするが、イエスは「あなたがたの中で、罪を犯したことの無い人が、まずこの女性に石を投げなさい」と言う。すると一人一人立ち去り、誰もいなく

なり、女性だけが残される。そこでイエスは彼女に向かって「婦人よ、Γύναι」(8:11)と呼びかけ、「誰もあなたを罪に定めなかったのか」と言うと、その女性は「主よ、κύριε 誰も」と答える(ヨハ 8:1-11)。この箇所では、呼格がそれぞれその立場によって異なり、「先生」「婦人よ」「主よ」と、話相手との関係による役割語とでも言うべき呼びかけが使われている¹⁶。

またマグダラのマリアは、イエスの復活後、最初に御使いから「婦人よ」と呼びかけられるが、それが誰であるかわからず、「ある人たちが私の主を引き取りました(αἴρω)」と返事をする。次にイエスが、「婦人よ」と呼びかけると、今度はそれを園丁と思い、「私が彼(J)を引き取ります(αἴρω)」と言う。そこでイエスが「マリア」と呼びかけると、彼女は初めてそれがイエスだと気づき、「ラップウニ/ῥαββουνί/呼格)=先生/Διδάσκαλε/呼格)」(ヨハ 20:16)と呼びかける。ここでは「主よ」と呼びかけるのではないが、イエスに名前を呼ばれて「ラップウニ」「先生」と呼び返す啁啄同時の呼応関係がある。ただその後、イエスは「私に触れてはいけない。まだ父の元へ上っていないのだから」(ヨハ 20:17)と言う。イエスから「婦人よ」と呼ばれた後、イエスから「いけない」の警告、禁止があるのは、マルタの場合と似ているということが出来る。

ヨハネ ㉔「婦人よ」 ㉕「ラップウニ、先生」 ㉖「～いけない」

ルカ ㉗「主よ」 ㉘「マルタ、マルタ」 ㉙「～ならない」

福音書全体で、名前が明示されてイエスに「主よ」と呼びかける女性は、マルタ一人であり、「先生」と呼びかける女性は、マグダラのマリア一人である。それに対し、「主よ」と呼びかけるが、名前が明示されていないのは、カナンの女性(マタ15:22,25,26)、サマリアの女性(ヨハ4:11,15,19)、姦通の場で捕らえられた女性(ヨハ8:1-11)の三人である。

¹⁶ 日本語での「よびかけ語」については以下参照。永田高志『対称詞体系の歴史的研究』(和泉書院2015年)。李 紫娟「呼びかけの言語行為についての研究」(岡山大学大学院学位論文 平成27年)。但し、これらの書において、呼びかけの「～よ」についてはふれられていない。

(2) イエスの発言 「マルタ、マルタ」

マルタが「主よ」と呼びかけるのは、称号であって、「イエス」という名前ではない。他方、主であるイエスがそれに答えて呼びかけるのは、「マルタ、マルタ」という個人の名前(二回)である。

① 人名での呼びかけ

ルカ福音書

ルカ福音書において、イエスが名前でもって呼びかける人は、基本的には男性であり、女性のマルタは例外である。そこで男性四人、ザアカイ(19:5)、シモン(22:31)、ペトロ(22:34)、ユダ(22:48)について見てみよう。

(一) ザアカイ

19:5 「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、あなたの家に泊まる～」

19:8 「主よ、御覧ください、私の財産の半分を貧しい人々に施します」

イエスが、「あなたの家に泊まることにしている」と言われると、ザアカイは喜んでイエスを迎え入れる(ὑποδέχομαι)。マルタの場合、イエスは彼女にこうしたことは言わないが、マルタはイエスを「迎え入れる」(ὑποδέχομαι.10:38)。「迎え入れる」(ὑποδέχομαι)という動詞は、ルカにおいてはこの2回だけであり、一方は女性であり、他方は徴税人の頭で金持ちである。ルカ福音書においては、例外的な存在である男性—ルカで金持ちが評価されることはない—と女性の二人は、どちらもイエスを迎え入れ、「主よ」と呼びかけている。

(二) シモン

22:31 「シモン、シモン、見よサタンはあなたがたを麦のようにふるいに～」

22:33 「主よ、牢獄にでも、死に至るまでも、あなたと共に行く～」

22:34 「ペトロ、～あなたは三度、私を知らないと否認するで～」

イエスは過ぎ越しの食事を弟子達と一緒にするとき、ペトロに「シモン、シモン」と呼びかけて、自分は祈ったから、この先「あなたが立ち直ったときには、兄弟を力づけてやりなさい」と言う。この言葉を受けてシモンは、「主よ」と呼びかけ、自分は「牢に入っても、死んでもよいと覚悟しています」と勇ま

しく返事をする。それに対し、イエスは再び、今度は「ペトロ」と呼びかけて、いや、「あなたは三度私を知らないと言うであろう」と言う。ヘブライ語のシモンからギリシア語のペトロへと呼びかけが変わるが、ヨハネ福音書のマグダラのマリアの場合にも、ヘブライ語のラップウニがギリシア語に訳されて先生と言われるとあり、両者は相似する。

ラップウニ (ヘブライ語) → 先生 (ギリシア語) ヨハ 20:16→16

シモン (ヘブライ語) → ペトロ (ギリシア語) ルカ 22:31→34

(三) ユダ

22:48 イエス 「ユダ、あなたは接吻をもって人の子を裏切るのか」

22:49 周りの者たち 「主よ、剣で切りつけましょうか」

22:51 イエス 「そこまでにしなさい」

イエスはペトロに対して「シモン、シモン」と二度名前を呼び、続いて「ペトロ」と一度名前を呼ばれた後、今度はユダに対して「ユダ」と名前と呼ばれる。ザアカイの場合は別であるが、シモンとユダが名前でもって呼ばれるのは、その後、イエスからの忠告、禁止があるからである。

シモンの場合には「あなたは私を三度知らないというであろう」と警告され、ユダの場合には、イエスが彼に「ユダ」と呼びかけた後、「主よ」とイエスに呼びかけるのは、ユダ自身ではなく、イエスの周りにいた人々であるが、彼らが「剣で切りつけましょうか」と言うのに対し、イエスは「そこまでにしなさい」と止める。ユダ自身に直接、禁止があるのではなく、禁止は周りにいた人々に対してであるが、シモンの場合に近い話ではある。

② 名前の連呼

(一) 旧約聖書

旧約聖書には、アブラハム(創 22:11)、ヤコブ(46:2)、モーセ(出 3:4)、サムエル(サム上 3:6,10)¹⁷、アブシャロム(サム下 19:1,5)等の男性に対して、神からの呼び

¹⁷ サム上 3:6 は、マソラ・テキスト(MT)のヘブライ語は1回(שמעאל)であるが、七十人訳(LXX)のギリシア語は二回(Σαμουηλ Σαμουηλ)とする。但し、新共同訳はこれを呼びか

告、禁止の呼びかけではなく、悲歎、慟哭の叫びであって、我が子が5回、アブサロムが3回繰り返され、その激烈さが表現されている。

これらの用例から考えられることは、2回名前を呼ばれるというのは、基本的には神からの禁止、警告が告知される場合だということである。注意、警報、緊急などの呼び出しなどが、最低2回は繰り返しなされることなどからも、呼ぶ機能の一つとして、こうしたことはよく理解されることである¹⁸。

(二) 新約聖書

ルカ福音書においては、「主よ、主よ」(6:46)、「先生、先生」(8:24)、「マルタ、マルタ」(10:41)、「エルサレム、エルサレム」(13:34=マタ 3:37)、「シモン、シモン」(22:31)などの連呼がある¹⁹。マルタとシモンの場合は、対応関係があると見られるので、両者は合わせて考察することとする。

個人的な名前前で連呼があるのは、女性ではマルタ、男性ではシモンの二人だけである。

¹⁸ このほか、神に対しての2回の呼びかけ、「わが神、わが神」(יְהוָה אֱלֹהֵינוּ/Ὁ θεὸς ὁ θεός μου. 詩 22:2)、「Ηλι ηλι/エリ、エリ. Θεέ μου θεέ μου」(マタ 27:46)「Ελωι ελωι/エロイ、エロイ. Ὁ θεός μου ὁ θεός μου」(マコ 15:34)等がある。これには「なぜ」(מָה לָּ/ἵνα τί)が続き、神に対して直接に「見棄てないでください」という禁止を求めるものではないが、それに近い反語的な呼びかけと考えられる。また、人名ではないが、エレ 6:14.8:11では、「平和、平和」と平和が2回繰り返されるが、これは、彼らはこう言うが、平和はないという否定的な意味で使われている。但し、イザ 57:19の「平和、平和」は肯定的に用いられている。このほか、サム下 16:16には、「王、万歳。王、万歳」という「歓呼の連呼」もある。連呼でなく単独の歓呼、「王、万歳」は、サム上 10:24. 王上 1:25, 34, 39. 王下 11:12. 代下 23:11 の旧約聖書に、「ユダヤ人の王、万歳」は、マタ 27:29. マコ 15:18. ヨハ 19:3 の新約聖書に見い出される。

¹⁹ 同じルカの「使徒言行録」に記されている所謂「パウロの回心」の記事も、同じパターンで記されており、マルタ、シモン、サウルの三者は共通する。「パウロに対しての「サウル、サウル」の連呼は3回繰り返して来る(9:4.22:7.26:14)。そして続けて「なぜ、私を迫害するのかわ/τί με διώκεις」と言って、パウロを咎められるからである。この「なぜ」は、詩 22:2. マタ 27:46. マコ 15:34 のそれに対応するであろう。

(i) 「主よ、主よ」(6:46)

マルタとシモンがイエスに対して呼びかける「主よ」は、それぞれ1回であるが、「主よ」を2回続けて言う「主よ、主よ」が、マタイとルカの両福音書に見出される²⁰。

ルカ 6:46 「～『主よ、主よ』と呼び～なぜ～言うことを行わないのか」

マタ 7:21 「～『主よ、主よ』と言う者が～天の国に入るわけではない」

マタ 7:22 ～『主よ、主よ、私たちは～ではありませんか』

マタ 7:23 ～『あなたがたのことは全く知らない。～離れ去れ』²¹

ルカ 6:46 とマタ 7:21 の二か所は、イエスが弟子たちに対して、あなたがたは私に対して「主よ、主よ」と呼びかけるがと言って弟子たちを咎める話である。イエスは「主よ、主よ」という連呼を批判するわけである。それは、そう呼びかける人たちがイエスの言うこと、その言葉を行なわないからである。すでに本稿の前半で述べたように、ルカは「言葉を聞いて行なう」ということを重視する²²。「主よ、主よ」という人はそうではないと非難、叱責するのである。

(ii) 「先生、先生」(8:24)²³

イエスの一行が舟で湖を渡っているとき、突風が吹いて来て、危なくなつたので、弟子たちは眠っていたイエスを起こして「先生、先生、私たちは溺れそうです」と言う。すると、イエスは起き上がって、風と荒波を叱りつけ、突風

²⁰ 但し、ギリシア語では、同じ「キュリオス」の呼格であるが、譬え話の中で、イエスに対してではないので、「ご主人」と訳される箇所もある。「ご主人、ご主人、開けてください」(マタ 25:11)、「ご主人、開けてください」(ルカ 13:25)。出 34:6 では、マソラ・テキストのヘブライ語では「主」が2回(יהוה יהוה)であるのに対し、七十人訳のギリシア語では「主なる神/Κύριος ὁ θεός」と訳され異なる。マタ 27:46 には「神」が2回の連呼「わが神、わが神/Θεέ μου θεέ μου」が記されている。

²¹ ルカ 6:46-49 の箇所で行われている。同じことはマタ 7:24-27 でも言われている。ルカ 6:46 「主よ、主よ」→6:47-49 「家と土台」。注 18 参照。マタ 7:21-23 「主よ、主よ」→7:24-27 「家と土台」

²² 「マルタとマリア」—ルカ 10 章 38-42 節の文学的考察(前半)—, 43-45 頁参照。

²³ 並行個所のマタ 8:25 では「主よ、助けてください」、マコ 4:38 では「先生」と、それぞれ一回ずつである。マタイは「主よ」であり、マルコは「先生」であるが、この「先生」はディダスカレ/Διδάσκαλε であって、ルカの「先生」エピスタタ/Επιστάτα とは異なる。

は静まって風になる。その後イエスが云うのは「あなたがたの信仰はどこにあるのか」という咎め、叱責の言葉である。

(iii) 「エルサレム、エルサレム」(13:34=マタ 23:37)

「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分の元に遣わされた人々を石打ちにする者よ。めんどりが自分の雛を羽の下に集めるように、私は何度、あなたがたの子らを集めようとしたことか。だが、あなたがたは望まなかった。

35.見なさい。あなたがたの家は見捨てられる。」

これは人に対してではなく、イエスがそこで死ぬことになっている都に対しての言葉であるが、その都に対し、「預言者たちを殺し、～あなたがたの家は見捨てられる」と非難する。エルサレムは聖なる都であるが、ここでもやはり名前の連呼の後、厳しい咎め、叱責の言葉がある²⁴。

(iv) 「マルタ、マルタ」(10:41)と「シモン、シモン」(22:31)

マルタがイエスから名前を二度呼ばれてたしなめられるように、ペトロもまた二度名前を呼ばれて忠告される。ただ、忠告されるのは、一方はマルタの言ったことに対してであり、他方はペトロが云ったことのそれからのことに対してである。マルタの場合には、彼女が「主よ」と呼びかけたのに答えて「マルタ、マルタ」と呼び返されるが、ペトロの場合には、先に「シモン、シモン」と呼びかけられ、彼が「主よ」と言って覚悟のほどを述べると、イエスは今度は「ペトロ」と呼びかけ、しかしながら3回私を知らないと言うだろうと言われる²⁵。

「マルタとマリア」の話は10章、「イエスとペトロ」の会話は22章と、12章もかけ離れた箇所には書かれているが、両者の「主よ」と「主よ」、「マルタ、マルタ」と「シモン、シモン」を合わせて見れば、その対応関係がきれいに見え

²⁴ エルサレムはイエスにとって、復活の町であると同時に、受難と死の町でもある。

²⁵ ペトロの3回のイエス否認(ルカ 22:57,58,60)は、ルカ福音書全体でのペトロの3回の「主よ」(ルカ 5:8,12:41,22:33)に対比できるであろう。ペトロの「主よ」(22:33)の後には、使徒たちの「主よ」(22:38)の呼びかけがあるが、その後、イエスが彼らに言うのは、ペトロに対してとは異なり「充分である」という肯定的な言葉である。

てくる。すなわち、両者はキアスムス（交差法）の形式で構成されており、これはルカが意図的に構成したものではないかと考えられる²⁶。両者にはその根底において密接な内的関連があると見られるからである。

両記事は、話として外的表現の面から見れば、何の関係性もないように見える。一方はマルタとマリアの姉妹の「聞くこと」と「奉仕すること」の対立が問題となっているのに対し、他方はペトロがイエスに死の覚悟のほどを述べると、イエスは彼が自分を否認するというを前以って予告されるという二人の言い分の対立という点である。しかしながら、「イエスとペトロ」の会話の文脈を考慮に入れて考察すれば、この二つの単元は相俟って、「聞くこと」と「奉仕すること」の大切さを説いていると考えられる。

(i) 両者の対応—キアスムス—

④ マルタの呼びかけ	「主よ」	10:40
⑤ 主の呼びかけ「マルタ、マルタ」		10:41
⑥ 主の呼びかけ「シモン、シモン」		22:31
④' ペトロの呼びかけ	「主よ」	22:33

(ii) 両者の文脈

「マルタとマリア」の話では、「聞くこと」と「奉仕すること」が問題となっているが、「イエスとペトロ」の会話では、ペトロのイエス否認の予告が問題となりながらも、その前には「奉仕すること」の大切さが説かれている。こうしたことから、「奉仕する」ディアコネオー/*diakoneō*(διακονέω)は、両者の鉤言葉となっている。

²⁶ ここには、ウィザリントン、荒井献がいう「男と女の並記好み」(penchant for malefemale parallelism)があると考えられる(『聖書の中の差別と共生』(岩波書店 1999年)172-185頁)。ただそこで並記されているのは、「マリヤム・マルタ」と「よきサマリア人」である。よきサマリア人の「行なう」に対してマリアの「聞く」ことが対比されており、マルタは抜けている。他方、筆者の場合は、マリアが抜けるが、「マルタとマリア」の主題は、後半のマルタとイエスの会話にあると見て、そこで問題となっている「奉仕する」ことから、彼女を22章のペトロと対比するのが妥当ではないかと考える。それは以下に述べる理由からによる。

(a)マルタ：奉仕する女性(10:38-42)

マルタはイエスを家に迎え入れ、あれやこれやの接待をするが、それは「多くの奉仕」(名詞・単数)であり、彼女はイエスに姉妹マリアが私に接待すること、すなわち「奉仕する」(動詞・不定詞)ことを「放っています」と訴える。「放っています」と訳される動詞、カタレイポー/καταλείπω は、κατα+λείπωの複合動詞で、その基本義は「後に残す」である²⁷。日本語訳のほとんどは「(もてなしを/奉仕を)させる」と訳しているが²⁸、この動詞によって、「奉仕すること」が、マルタにとっては楽なことではなく、負担、重荷となっていることが意味されている。

しかしながら、ルカ福音書の中では、ペトロの姑(4:39)や多くの女性たち(8:3)が「奉仕する/仕える」と言われており、イエスはペトロに対して「仕える者のようになりなさい」(22:26)と言い、「私は～給仕する/仕える者のようである」(22:27)と述べている。イエスにとって、「奉仕する」は決して否定的な意味では使われていない。むしろ積極的な意味合いで、肯定的に用いられている。

ではなぜここで、ルカは「奉仕すること」が重荷となって、私一人では大変であるとイエスに訴える者としてマルタを描いているのであろうか。それは、奉仕することは、言うは易く行なうは難しで、実際には大変な仕事であるということを示唆するためではないか。「多くの奉仕で忙殺される」(10:40)というのは、客を迎えての接待、もてなしは、当然、評価されて然るべきことではあるが、あれやこれやとやることが多く、実際には、忙殺され(10:40)、心が掻き乱され(10:41)ことがおこる。もてなすには世話が焼け、接待するには手がかかる。それゆえに、問題は心の持ちよう、有りようであって、奉仕すること自体ではない。この先の 12:22 で言われている「思い煩ってはならない」ということを肝に銘じ、まずは「神の国を求め」(同 12:31)ことが大事であるということ

²⁷ BDAG(p.184), 6.to cause to be left to one's own resources, *leave (behind)*. b.leave without help τινά w. the inf. of result. "my sister has left me without help, so that now I must serve alone" Lk 10:40.

²⁸ 本稿注 1 参照。しかしながら、文法的には「～させる」という使役形ではない。

とである。なぜならそれは、「あなたがたの父は、～、これらのものをあなたがたが必要としていることをご存知だからである」(12:30)。この「必要としている」は「マルタとマリア」の話の中で言われている「必要なことは一つである」(10:42)につながり、ひいては「彼(J)の言葉を聞く」(10:39)に結びつく。イエスのマルタに対する言葉は、「奉仕する」すべての人々に注意を喚起するものとして書かれていると考えるべきであろう。

(b) ペトロ：奉仕する男性(22:24-30, 31-34)

イエスがペトロの否認を予告する单元B(22:31-34)の前には、使徒たちの間で、誰が「一番偉い人」かという議論がおこり、それに対してイエスが「上に立つ人/指導する人」は、「奉仕する人」のようになりなさいと言われる单元Aがある(22:24-30)。これは、イエスが使徒たちと過ぎ越しの食事をする場面での話で、そこでイエスは、「食事の席に着く人/ἀνακειμένοςと、奉仕する人/ὁ διακονῶνでは、どちらが偉いか、食事の席に着く人ではないか。しかし私は、あなたがたの中で、奉仕する人のようである」(22:27)と言う。すなわち、ここで、動詞「奉仕する」の男性分詞「奉仕する人/ὁ διακονῶν」が3回(22:26,27,27)言われている。

こう言った後に、イエスは突然「シモン、シモン」とペトロに呼びかけ、「あなたが立ち直ったときには、あなたの兄弟たちを力づけなさい」と言う。シモンは一番弟子であるから、ほかの12人の兄弟弟子を力づける必要があるというわけである。そうすると、イエスに対してペトロは「主よ、牢獄にでも、死に至るまでも、あなたと共に行く覚悟です」と云う。それに対しイエスは「ペトロ、私はあなたに言う。～今日、あなたが私を知らないと三度否認するまでは、鶏は鳴かないであろう」と云う。イエスは、ペトロがイエスを否認しないと勇ましく言うことを否認するのである。否認が三度というのは、「奉仕する人」が三度、イエスの口から言われているのに対応するからであると考えられる。

「一番偉い人」については、すでに9:46-48の单元で扱われているが、それは彼ら(弟子たち)の中で誰が一番偉い人かという議論であった。同様に、「上に立つ人」は「奉仕する人」のようになりなさいと言われる单元(22:24-30)が始ま

るのも、「彼ら（使徒たち）の中で、誰が一番偉いだろうかと言って、論争が彼らの中で起こった」(22:24)からである。こうしたことから考えると、「一番偉い人」問題は、弟子たちの中でのことであり、まさにペトロはその当事者なのである。そえゆえ、イエスが使徒たち(あなたがた)にこうしたことを話した後、唐突に「シモン、シモン」と呼びかけてペトロ個人に話すのは、「一番偉い人」は「奉仕する人」であるということと、密接に関連しているからである。ただその後、イエスが前以って「あなたは立ち直ったら」と言って、シモンに注意を促すのは、三度強調されて言われる「奉仕する人」であっても躓くことがある、三度知らないと言うことがあると告げるためであると考えられる。上に立つ人/指導する人ペトロが奉仕する人のようであっても、イエスを知らないという過ちを犯すという注意、警告が発せられる。シモン、シモンと名前が二度呼ばれる裏には、こうした背景があると考えられ、マルタが二度、マルタ、マルタと呼ばれ注意、警告されるのと同様である。

このように、動詞「奉仕する」をめぐる、マルタとペトロの間には意味的な内的連関があり、それが文学的な外的構成—キアスムス—によって表面的にあらわされている。

おわりに

以上、「マルタとマリア」の後半、会話文の最初の部分であるマルタとイエスの「呼びかけ」までを考察した。「呼びかけ」は、人と人との会話の最初の発語であり、それによって会話がはじまるきっかけとなる大事な言葉である。福音書におけるイエスとの会話は、「先生」「主よ」「ダビデの子」などの呼びかけで始まることが多いが、それによって発話者とイエスとの関係性が明らかにされ、一方、イエスの方からの呼びかけが、「ザアカイ」「ユダ」などの一語か、「マルタ、マルタ」「シモン、シモン」のような連呼であるかによって意味合いが変わる。連呼は、旧約以来、警告、禁止を告げる場合に使われるのであり、まさに

マルタとペトロ，女性と男性，二人の連呼には，共通する「奉仕する」を媒介として注意，勧告がなされるのである。